

## 戦後日本における口演童話研究の展開

—吉田裕『日本人の戦争観』を手がかりとして—

中村 美和子\*

### A Historical Analysis After World War II Related to Studies

### About Japanese Style Storytelling for Children, “Kōen Dowa”:

Through the Perspective of a Historical Study of Yutaka YOSHIDA, Titled *Japanese Views of Wars*

Miwako NAKAMURA

#### Abstract

This review paper aims at organizing studies for researchers about Japanese style storytelling for children, “kōen dowa”. In reviewing studies of Japanese storytelling after World War II, through the perspective of Yutaka YOSHIDA, a historical study titled *Japanese Views of Wars*, seven periods are identified as follows: (1) the early occupation period, (2) towards the 1951 San Francisco Peace Treaty, (3) the 1950s, (4) the era of Japanese rapid economic development, (5) the 1970s, (6) the 1980s, (7) towards the year 1995, marking the 50<sup>th</sup> anniversary of the end of World War II.

By arranging the studies in order according to these periods, it is revealed that studies about Japanese style storytelling and Japanese views of wars are resonating each period. Also, there are two remarkable periods in the history of studies about Japanese storytelling. The first one is the 1980s, and the second is the early 1990s. In the former, it is testified by one storyteller that many Japanese style storytelling performers had followed the policy line in wartime Japan. In the latter, various academic studies had begun to be published, especially on different approaches towards storytelling such as history, sociology, social education, language education, arts.

**Keywords: “kōen dowa (Japanese style storytelling)”, storyteller, orality, views of wars, war responsibility**

#### 1. はじめに

「口演童話」は、子どもたちを大勢集めた会場での身ぶり手ぶりをともなう童話の語り<sup>1</sup>である。創始<sup>2</sup>を明治期なかば過ぎとし、第二次世界大戦後しばらくの間まで日本全国で盛んに提供された。上地（1997）によれば、口演童話創生期の三大家、巖谷小波（1870-1933）、岸辺福雄（1873-1958）、久留島武彦（1874-1960）にはナショナリズムが共通しており、その思想は師範学校出身の教師たちによって受け継がれる。教師た

---

キーワード：口演童話、語り手、声の文化、戦争観、戦争責任

\* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

ちは童話団体の研究会で語り方や話材を検討し、勤務校や校外、時には外地での実践<sup>3</sup>を重ねた。また、職業的専門家を中心に「大仰な演技と聴衆への迎合」（櫻井，1997: 100）を特徴とする形態が発展し、「大衆を相手として話されるようになった大正年間、昭和初期には『童話』と言えば口演童話のことを意味し、大衆童話を指した」（内山，1972c: 165）状況となる。その大衆化は、子どもの心の発達を考えた「教室童話」<sup>4</sup>を主張する小学校教師たちの一派により批判された。だが、教室童話の実践者たちも「国策としての日本少国民文化協会の結成（1941）」（川勝，[2004] 2008: 4）による統制で「童話報国」に同調する（内山，1972c: 170）。口演童話は、第二次世界大戦前・戦中期には国民の戦意高揚に貢献したのである。口演童話の活動期を1950年代半ばあたりまで<sup>5</sup>とした上地（1997）は、後退要因として「テレビやマンガ週刊誌などの新しいメディア」（前掲: 192）登場に加え、「戦前・戦中期の責任は不問のまま」（前掲: 192）という活動主体の姿勢を最大のものとする。

上述のとおり口演童話は過去に隆盛のあった児童文化で、現在に受け継がれてはいない。けれども、大人が子どもに働きかける「声の文化」<sup>6</sup>という意味において、あるいは文化伝承の一つのありようとして、その教育的意義の評価を重ねることは有意と言える。宮澤（2002b）が言及したように、教育においては伝統的に「声の文化」が重んじられ、聴覚的な「聲咳に接する」関係、触覚的な「人格のふれ合い」関係により教育の真価が問われてきたからである。そして口演童話には、一時代をなした児童文化として、活動主体、地域ごとの展開、思想、技術、話材などについての多様な検討も待たれる。20世紀前半の日本に独自の子どもの文化として、とりわけ、戦前・戦中期の内実を社会的・歴史的に解き明かしていくことで、今日の子どもの文化、あるいは子どもの文化と戦争をめぐる議論に一つの視座を提供していけると考える。

口演童話には約45年にわたる興隆（上地，1997）があったが、研究蓄積は十分ではない。『日本口演童話史』（1972）に「史的発達については、今までの童話史においては殆ど触れていない」（内山，1972a: 前付）と問題提起がある。それは一つには、戦中・戦後世代が口演童話の戦時協力に批判的であり、「口演童話史の書き手たちは、無邪気に胸を張って、過去の事績を並べ立てられる状況に置かれていなかった」（堀田，2008: 69）ためである。富田は、『日本口演童話史』を「わが国のストーリーテリング（口演童話）の、これまでににおける、ほとんど唯一のまとまった沿革史」（富田，1985: 44）と評するが、「理論化したもの、体系化したもののすぐれた研究は、ほとんどない」（富田，1985: 62-63）とし、残された台本の読解による評価、ならびに巖谷小波、久留島武彦といった童話家の著作に学ぶ必要を論じる。30年以上前の富田の問題提起にもかかわらず、近年においても「口演童話というジャンルそのものについての研究の遅れ」（金，2010）、口演童話研究が「質量ともに十分とはいえない」（松山，2010）といった指摘がある。以上を踏まえ、本研究では、口演童話が衰退に向かった戦後日本において取り組まれた研究の展開を整理し検討をおこなう。そして、口演童話の研究の遅れがなぜ生じたのかを考察していく。

## 2. 研究の目的と方法

研究蓄積の検討に当たっては、口演童話に関する学術研究のみならず実践者による実演に資するための研究も含めることとし、概説、年表なども整理の対象とした。文献を収集したところ特徴的であったのは、口演童話の話術・話材に関する実践研究を除き、単著の学術書刊行が極めて限られている点である。具体的に示すと、游珮芸著『植民地台湾の児童文化』（1999）、金成妍『越境する文化——朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』（2010）であった。前者は口演童話のほか童謡、作文なども含むが、2巻とも植民地統治下における口演童話の日本語教化活動としての側面を考察の対象とする。このことと、先述した口演童話の後退要因に関する「戦前・戦中期の責任は不問のまま」（上地，1997: 192）という活動主体の姿勢への指摘を考え合わせたとき、口演童話研究において、戦前・戦中期の国策協力をどう評価するかという点に一つの課題があることがうかがえる。

口演童話が時局を背景として展開したのと同様、口演童話研究もまた、社会的・歴史的背景のなかで展

開してきたのではないか。口演童話の戦前・戦中期のあり方への反省が不問に付されたことには、社会的・歴史的背景はないのか。本研究では、この二つの問いについて考察していく。そのため、試みに、戦後史のなかで日本人の戦争観がどのように変容してきたのかという吉田（1995）の分析を手がかりに、戦争観の形成や変容に照らし合わせて口演童話研究の展開を検討し、研究蓄積を評価していく。吉田の枠組みを用いるに当たり、調査に関しては、吉田の論考が発表された1995年までを目安とし、2000年までを区切りとして発表された口演童話研究を対象とする。

### 3. 吉田裕『日本人の戦争観——戦後史のなかの変容』（1995）について

刊行から20年が過ぎた同研究書は国内で版を重ね、中国、韓国でも翻訳され、広く読み継がれてきた。吉田の課題はアジア・太平洋地域における侵略性、加害性が戦後日本で十分に意識されてこなかった理由は何かという点にあり、歴史的要因の第一として「十五年戦争のあり方やその終結の仕方にかかわる諸要因」（吉田、2005: 260／以下、引用は文庫版による）、第二として「独特の戦後処理のあり方」（吉田、2005: 262）を挙げた上で、各々の問題を整理する。

十五年戦争に関する問題としては、(1)日中戦争以降は国民の生活が犠牲にされ軍需生産の拡充政策がとられたために、戦中派が当時を「『もの』のない『暗い』時代としてだけ回顧する傾向が根強い」（吉田、2005: 261）こと、(2)対外戦争と戦時体制が軍部主導の独裁だと受け止められ、東京裁判をはじめとする戦後処理においても戦争の全責任を軍部に負わせ、官僚、宮中グループ、政財界、マスコミほかの戦争協力や同調が不問に付されたこと、(3)日本の敗戦はアメリカの軍事力によるものとされ、中国の対日抗戦に代表されるアジアの民族主義の役割が評価されていないこと、(4)欧米諸国のような植民地との闘争なしに敗戦により台湾、朝鮮を失い、植民地主義への反省がなされなかったこと、という4点が指摘される。

戦後処理に関する問題としては、(1)日本占領がアメリカ単独でおこなわれ、よりどころとする国際協定、取り決めがなかったために戦争観もアメリカの影響下に形成されたこと、(2)対日講和が戦後処理目的から冷戦進行下で日本を西側陣営に加える政治的配慮へと転換していったために、戦争責任訴追がゆるやかになったこと、(3)アメリカの冷戦政策のもと日本の戦後処理が進行し、アジア諸国の要求がないがしろにされ、かつ歴代保守党内閣が戦争責任を認めなかったこと、加えて、自衛か侵略かをめぐる戦争評価が保守・革新対峙の論点となり差し迫った解決が回避されたこと、という3点が指摘される。

こうした歴史を背景に日本社会で形成された戦争観の第一として「軍隊や戦争に対する強い忌避感」（吉田、2005: 264）、第二として被害者意識の濃さ、経済復興後の経済問題と結びついた戦争観への転化、第三として国際状況の変化に応じた戦争の歴史の読み替えで生じる歪み、が挙げられる。吉田は結論を導くために戦後を七つに時代区分し、発言、新聞・雑誌記事、論文、アンケート調査、報告書、自伝、戦記など多様な資料に当たり、政治家・有識者から市井の人びとにいたる声を拾い検証をおこなう。七つの時代区分とは、(1)「太平洋戦争史観」が成立する占領期、(2)戦争責任の認識が発展していかない占領期から1951年のサンフランシスコ講和条約まで、(3)最小限の戦争責任を対外的に認めつつ国内では戦争責任を不問とするダブル・スタンダード成立の1950年代、(4)経済復興による戦後の終焉意識が広がり、戦争体験の「風化」が進行した高度成長期、(5)オイル・ショックを乗り切り経済大国化していくなかで、戦争問題への意識変容が見られた1970年代、(6)教科書検定が国際問題化したのちに政策転換が図られ、アジアへの経済進出、昭和天皇の戦争責任問題、海軍史観、戦争体験記録などによりダブル・スタンダードが動揺した1980年代、である。加えて、(7)戦後50年に当たる出版年、1995年にいたる「大東亜戦争肯定論」の退潮と変容、政治主義的・現実主義的な戦争観が主流であること、敗戦50年をめぐる動向にもふれている。

本研究で整理していく口演童話研究は必ずしも戦争観、思想を表出させたものではない。しかし、口演童話を次世代育成にかかわる「教育文化」<sup>7</sup>ととらえたとき、口演童話の研究そのものもまた次世代の研究

てとらえていくことは可能であると考え。よって次節からは、吉田が提示した戦争観の変容を分析するための時代区分に沿い、思想に注目しながら口演童話についての文献整理を試みる。

#### 4. ダブル・スタンダード成立期までに現れた口演童話研究

はじめに、戦後の口演童話研究が現れてくるまでの終戦後まもない口演童話界の動きを確認しておく。終戦直後から口演童話は戦前・戦中期と同様、児童文化活動に大いに活用された（上地，1997）。たとえば教室童話研究会<sup>8</sup>では1945年11月には早くも戦後初の会合を開き、同月内に戦争孤児慰問、疎開残留児童・地元児童向けの子ども大会を実施し、翌1946年1月に『教童同人誌』を発刊、1947年2月に機関誌『教室童話』を復刊する（河合，1983）。また、同年には日本童話会<sup>9</sup>が設立され、機関誌『童話』<sup>10</sup>が発刊される（金沢，1985b）。上地（1997）は当時の関係紙誌により口演童話諸団体の再発足、全国各地での口演童話家たちの活動再開を確認し、いずれも戦争協力を不問とし、あらゆるものが灰燼と化したところで口演童話が野戦的に活用されたと述べる。教室童話研究会同人の金沢嘉市<sup>11</sup>は1946年3月に東京児童文化連盟を結成して口演童話ほかの児童文化を提供する子ども会を開催し、秋田県に出向いて各種児童文化財を提供する見返りに米を集める「救援米懇請運動」も展開した（金沢嘉市著作編集委員会編，1989）。

影山（1988）によれば、敗戦の動揺で教壇を去る教育関係者もいたが、占領軍最高司令官総司令部（GHQ）による1945年の四指令、1946年「米国教育使節団報告書」、1947年「教育基本法」公布といった展開のなかで、教師たちは教育の新たな方向を模索する。教室童話研究会や金沢の活動歴からもうかがえるように、学校教育の復興が徐々に進むなか、教師たちにとって社会教育としての児童文化活動は自らの裁量で、まさに「民主的に」次々と実践していける機会だったのではないだろうか。終戦直後の混乱期に教師たちが取り組んだ児童文化活動の形態や実践、意義に関しては、今後さらなる調査分析が求められる。

##### （1）「太平洋戦争史観」が成立する占領期の研究

1950年代半ば以降、口演童話活動の後退が進むが、占領期に口演童話が活用されたことは、実践者たちにより童話の意義や理念についての見解、話術・話材の研究が発表される状況にあったことで分かる。

戦後まもなく出版された研究書に、三輪（1947）の『童話教育論』がある。童話学テキストと言えるほど内容が網羅的であるのは、三輪が師範学校の教職にあり、学校教育に偏った師範教育を改め、児童の生活全体を理解する目的で童話を教科に取り入れることを提案しているためであろう。三輪は童話教育が民主主義教育につながるという見解を示す。家庭教育に関する論述では、童話を読んで聞かせることを推奨し、子どもの要求に沿う読みが「民主的な明るい家庭、又教育的な家庭」（三輪，1947: 29）に結びつくとする。三輪の論考の第一の特徴は、復興や教育再建を意識し、「平和」、「民主主義」といった語を用いている点である。第二の特徴は、師範教育について論じながらも、皇国民錬成を目的とした戦中教師としての働きについてみずからがどう整理したのかという点についての言及がない点である。

こうした特徴の社会的背景として吉田（2005）の戦争観の分析に当たると、この時期には戦争責任が指導者層にあるとする「指導者責任観」が国民間に形成され、「東京裁判を受容してゆく思想的土壌」（吉田，2005: 31）となった。また、大東亜共栄圏建設のための聖戦という意味あいの用語「大東亜戦争」がGHQ検閲で一掃され、GHQの広報により「太平洋戦争」という呼称が定着していったと指摘がある。

吉田の分析から、教育者、教育研究者としての三輪の童話論を、アメリカの提示した「平和」、「民主主義」という価値観の受容のあらわれと位置づけられる。三輪が戦中教師の働きに特にふれないのは、敗戦が国民各人の責任ではなく指導者がもたらしたという社会意識に沿うものであると受け止められる。

##### （2）占領期からサンフランシスコ講和条約までの研究

前項に挙げた三輪と同様、「平和」、「民主主義」への注目という点では、先述の金沢（1951）にも論

考「おはなし教育の根本問題」がある。発表年には、サンフランシスコ講和条約調印により日本は国際社会に復帰した。同論考において金沢は、児童の人間性啓発には話者の思想人格が影響すると論じ、真実性のある話をし、問題を投げかけて児童と語るように勧めた上で、話者に祖国再建への意欲と平和への念願が求められるとする。ここでも、戦前・戦中期の童話教育をかえりみる視点は見受けられない。金沢の論考は三輪の単著と異なり『現代児童文化講座』所収で紙幅が限られていることもある。わずかに「真実こそ話の第一の要素」（金沢，1951: 185）に言及し、原爆図を描いた画家、赤松俊子の講演を1950年8月6日に聞きに行った際のエピソードにふれるが、視線の向かう先は過去ではなく新教育の教育目標である。

1950年1月から3月までの期間、金沢は勤務校<sup>12</sup>で、卒業を控えた6年生に乞われて「日本の歴史」授業を独自に実践し、4月から新5年生に同じ授業をおこなって教育界の耳目を集める。後者の教え子によれば、金沢は最初の授業で自分が戦前まちがった教育をしてきたことを真剣に詫び、正しい教育のために日本の歴史を改めて教えることになった（上地，1991a）。そのような個人単位での戦争責任への意識はあったが、吉田（2005）の指摘によれば、アメリカとソビエトの冷戦に移行していくなかで、アメリカによる対日宥和政策により対アジアへの賠償責任は軽微なものとなり、「国際政治の政治力学が日本の戦争責任を曖昧化する方向に作用した」（吉田，2005: 82）傾向が社会全体の様相である。戦争責任の曖昧化は、この時期以降の口演童話研究にはどう投影されるのか。その点を次項から検討していく。

### （3）ダブル・スタンダード成立の1950年代の研究

上述の金沢の論考のほかには1950年代に発表された口演童話研究として、原（1953）、安倍（1954）、安部（1956）、榎葉（1956）、内山（1957）、黒田（1958）がある。前四者はいずれも「話方」に焦点を当て、自身の童話実践体験を具体例に提示しながら随想的な童話論を展開している。内山の論考は語りによる実演童話だけではなく、読む「童話文学」、童話の本質的研究としての「童話学」も含む網羅的、通俗的な入門書で、黒田の論考は国語科教育の観点から口演童話の教育的意義にふれ、文学教育として口演童話の日常的実践を提案するものである。

では、この時期の社会背景は、どのようなものであったのか。サンフランシスコ講和条約調印後の戦争責任問題について、吉田（2005）は「ダブル・スタンダード」という用語で問題処理の方法を説明する。すなわち、「対外的には講和条約の第11条で東京裁判の判決を受諾するという形で必要最小限度の戦争責任を認めることによってアメリカの同盟者としての地位を獲得する」、「国内においては戦争責任の問題を事実上、否定する、あるいは不問に付す」（吉田，2005: 91）という使いわけ的な扱いである。そして、知識人が戦争責任問題を論理化できなかった理由として、知識人の責任意識のありようが、開戦に当たり、みずからが運命を決める機会を逃したことへの反省に留まっているためと指摘する。

童話界で活躍していた上記の童話家たちの論述においても、童話を語る技術、語る意義など、いつの時代にも普遍的、本質的な内容が中心で、そのために大戦の経験、教育方針の転換について論じる必要がないということもあり、国策に沿った活動への反省、謝罪は見受けられない。論を読み進める限りにおいて、戦前・戦後という断絶がなかったかのようにも取れる。この傾向は、戦争責任の曖昧化という、吉田の指摘した社会動向に沿うものと言えよう。

上述の研究のなかで注目される論述の一つに、安倍（1954）が話の構成を説明するために例示した話材「愛の出べそ」がある。戦前は「兵隊さんのおへそ」として語っていたものを「戦争」、「兵隊」などの言葉が含まれるために終戦後の一時期は語れなかったが、国際愛、母子愛がテーマであるから設定を変えて提示すると、ことわりがある。だが、舞台が満州で、当地での日本人の善行を描く物語を戦後に提供するには無理があると言え、そこにアジアに対する戦争責任を不問に付す姿勢を読み取ることができる。

いま一つ、注目される論述は内山（1957）による童話の歴史、日本の童話と民族性に関する概説である。「童話」の字義を説明する内容が近世の文献から掘り起こされ、巖谷小波<sup>13</sup>のお伽口演、「お伽話」から「童話」という言葉への置き換えが歴史的に述べられているものの、日本独自の口演童話の戦前・戦中期

の歴史には言及がない。論述の内容が童話の持つ民族性、民族的背景に移り、複数の研究者による日本民族の特色についての見解が列挙されたあとに日本童話の特徴が分析される。つづいて他国の童話と民族性にもふれ、以下、童話の分類と種類、型、要素、教育的使命、心理的基礎、話し方、構成条件といった各論へと展開する。こういった安倍（1954）、内山（1957）の例は、どう分析できるだろうか。

吉田（2005）によれば、1950年代の現象として「戦記もの」ブームによるナショナリズムの復権、旧幕僚将校の著作のベストセラー化、無名の将兵の戦争体験記の登場などがある。「戦記もの」に代表される戦争認識に対抗するベストセラーも同時期に現れたが、最大公約数的な国民の戦争観の特徴として、アジアの民族的抗戦が日本の戦争遂行へもたらしたダメージが認識されていないという盲点が挙げられている。

安倍が満州を舞台とした話材を解説に取り上げた点にも、内山が口演童話の戦時協力の歴史記述をしていない点にも、吉田の言う「アジアに対する大国主義的な意識」（吉田、2005: 113）の読み取りができ、ナショナリズム復権という現象に沿う具体例として理解することが可能である。

## 5. 高度成長期、経済大国化の進む 1970 年代の口演童話研究

### （1）「戦争の『風化』」が進行する高度成長期の研究

口演童話研究に関する文献を検討したなかで、特徴の一つと言えるのが高度成長期から 1970 年にいたるまでの状況である。1950 年代に活動主体による実践に資する入門書、研究書が刊行された後、1960 年代に発表された文献として確認できるものは上・山崎（1965）「児童文学と幼な子たち」、内山（1963）による口演童話の概説で、量的に限りがある。

「児童文学と幼な子たち」は『日本の幼稚園』所収で、岸辺福雄、久留島武彦という口演童話家のつくった二つの幼稚園での実践が「桃太郎主義」<sup>14</sup>にもとづく「天皇制国家の侵略主義に奉仕するもの」（上・山崎、1965: 100）だが、一種の体育主義になっていたと指摘される。そして、日本の創作児童文学者たちの作品に芸術性があってもおもしろさが欠けるのは、口演童話家たちのような幼児教育実践や現実の子どもを知る機会がなかったためではないかと分析される。『日本の幼稚園』は幼児教育思想、問題点を幼児教育史として検討することを目しており、口演童話もまた歴史的に考察される。1950 年代までの「童話の語り」という実践に関する研究、童話の理論的研究とは異なるアプローチがここで登場したと言える。では、このアプローチを吉田の戦争観分析に照らし合わせたとき、どう評価することができるだろうか。

吉田（2005）は高度成長期の戦争観をダブル・スタンダードが成立しているなかでの「戦争体験の『風化』」をとらえる。1963 年から全国戦没者追悼式という「内向け」国家儀式が実施され「終戦記念日」となるものの、黙とうによる追悼は市中でほとんど実施されずに形骸化したこと、1960 年代半ばまでのマンガ雑誌に「戦記もの」ブームが起こったことを「風化」の例とする。しかし、それは時の流れではなく、政治的・社会的条件下での傾向だと述べる。この時期、対外的には韓国、中華人民共和国との国交が正常化され<sup>15</sup>、ベトナム戦争反対運動が展開する。しかし、韓国との条約締結は植民地支配への反省をともなわない経済援助的なものであり、日中国交回復は経済主義的な動機で進められた。ベトナム戦争反対は加害者になることへの拒否であった。結果、ダブル・スタンダードは依然として堅持される（吉田、2005）。

上述の上・山崎（1965）の論考には侵略主義への批判的視点は認められるが、資料が少なく通史を起こすことが困難な幼児教育史を典型的な施設や人物で追うのが主目的で、口演童話そのものの通史的記述、歴史的評価ではない。実践者による童話論が発表されなくなり、過去の児童文化としての後退が認められる口演童話の歴史的考察については、内山（1963）の概説に「口演童話の成長の時代区分」として 600 字弱の記述があり萌芽が認められるが、その展開は 1970 年代、1980 年代を待たなくてはならない。

### （2）高度成長期終焉前後の研究

日本の高度成長はオイル・ショックで終焉を迎える。オイル・ショック前夜の高度成長末期に発表され

た論述に、口演童話の消滅を危惧する見解がある。一つは倉沢（1971）「口演童話の創造と変革」であり、いま一つは内山（1972a）が『日本口演童話史』に寄せた巻頭言である。倉沢は、「教育者として、次代の子どもに何を求めるか」（倉沢，1971：6）という目的論が欠如したままでは、1970年代後半には口演童話が滅亡すると見解を示す。内山は、童話史でほとんど扱われない口演童話を文字で書き残さないと歴史が伝えられないと問題提起する。倉沢の論考は表現依存の大衆童話への批判であり、1970年代の童話はストーリー性から脱皮し、子どもの未知を切りひらいて考えさせる内容を提供するよう主張するものだが、口演童話研究としての新たな視点の提示はない。

内山編『日本口演童話史』（1972）は、機関誌『童話研究』を発行していた日本童話協会の創立50周年記念刊行物で、都道府県別に通史をまとめようとした編集方針に特徴がある。ただし内容については、堀田（2008）が明治、大正期の記述に不足があること、近代的な都市の語りの先駆である口演童話を評価する手法に欠けることをはじめとして問題点が多いとする。確かに、原稿がない県については民話、伝説をかわりに掲載するというように、編集物としての統一感に欠ける。通史の記述が成立している県もあるが、活動主体たる個人・団体を網羅して活動形態、実践を追う形式にはできず、書き手の個人的回想、主たる口演童話家の経歴紹介に留まっている県もある。また、戦前・戦中期の記述についても、執筆者が多いために都道府県別の質的な差がある。たとえば全体の3分の1弱を占める東京都の記述では「疎開」、「空襲」といった語が見当たり、天野雉彦の国策協力にはふれていても、久留島武彦が日本少国民文化協会の童話部会の幹事長を務めていたことに関する記載はない。同様に、国策協力の活動を記した県もあるが、記録が消失したのか、残っていても敢えて記載を控えたのか、その時代の記述がない県もある。

この『日本口演童話史』の発刊直後、内山（1972c）は口演童話に関する概説を発表している。先述のとおり、内山には『童話学入門』（1957）につづき1963年にも口演童話の概説があるが、それらとの違いは、口演童話の発達史の形式で論述がおこなわれている点、「童話報国」に関する記述が付け加えられている点である。1970年代の口演童話研究も60年代につづいて量が限られており、ほかに挙げられるのは正月（1974）による幼児の心の発達に配慮ある童話創作、語り、幼児童話の教育的意義に関する論考である。戦中期から1970年代まで童話から遠ざかっていた正月には戦前・戦中期に関する記述はない。このような研究状況から考えると、口演童話の発達史を国策協力も含めて残そうという内山の童話研究の意図は、新たな試みとして注目されるものである。すでに口演童話の三大家が没し、内山と活動をともにした日本童話協会の明治20年代、30年代生まれの会員たちの高齢化が進んだ。それが発達史を残す直接の動機の一つであつたらう。では、そのような変化の社会的背景にはどのような動向があつたのだろうか。

吉田（2005）は高度成長の終焉期から1982年の教科書検定の国際化問題によるダブル・スタンダードの再編までを時代区分の一つとし、「過渡期」と位置づける。1975年の総理府統計局推計を引き「戦争を知らない世代」が6割近くなったことの影響を考慮し、80年代に重なる各種戦争観のせめぎ合いに着目する。その内容は陸軍の対極に位置する「海軍史観」の台頭、映画「八甲田山」のヒットに代表される軍隊・戦争問題の経済や経営論理による読み替え、庶民による戦争・戦災体験の記録化による生活史への注目、昭和天皇の1971年の訪欧、1975年の訪米が引き金となった国家指導者の戦争責任をめぐる言説などである。

口演童話が後退し、職業的な口演童話家がほとんどいなくなったのち、活動を継続したのは内山のような幼児教育者や教師たちであることは『日本口演童話史』掲載の関係者たちの経歴を確認すれば分かる。教育者、有識者という特色を有するが、内山が取り組んだ口演童話発達史の記述は、文化の記録という意味において、吉田の指摘する戦争・戦災体験を記録化する生活史の登場に通じるものがあると言える。

では、口演童話の実践者たちが次々と他界していったあと、口演童話を知らない世代にそれがどう受け止められていくのか。その時代変化に注目しながら、次に1980年代以降の研究を検討する。

## 6. ダブル・スタンダード動揺の1980年代にあらわれた口演童話研究

口演童話研究に関しては、1980年代は二つの特徴で説明が可能である。一つは1980年代半ばまでの「空白期」であり、いま一つは1980年代半ばの動向への注目である。まず、空白期について述べる。

『日本口演童話史』（1972）において口演童話の記録がないことを危惧し、発達史を企図した内山憲尚は1979年に没する。内山が『童話学入門』（1957）を発表した1950年代に、実践にもとづく「話方」関係の著書を出版した榎葉勇は1978年に亡くなっており、同じく実践論を著した原まさるが1982年には亡くなる。長寿に恵まれた実践者たちが他界したこともあり、1970年代半ばから1980年代半ばにいたるまでは口演童話研究と言える文献はほとんど見当たらない。口演童話研究の「空白期」とも言える状態で、高度成長期における研究の過少とともに特徴的である。

次に1980年代半ばの動向である。研究の「空白期」にあつて、児童文学研究者の瀬田（1982）が子どものための文化史研究書の中で、口演童話には「講釈ばりのイディオムをつなぎにした口頭芸が主で、ストーリーの分析や組み立てがなかった」（瀬田，1982: 292）と否定的評価を出す。この瀬田（1982）の見解に反論したのが児童文化研究者の富田（1985）で、日本の口演童話をストーリーテリングというジャンルの流れに位置づけて再評価する必要を論じる。富田の論考が所収された『ストーリーテリング』（1985）には金沢（1985b）による口演童話の回想記も収められる。同書出版の背景には、1984年6月の子どもの文化研究所・同紙芝居研究会主催「金沢嘉市先生の口演童話をきく会」開催がある。金沢が童話を語ったあとに<sup>16</sup>脚色について説明し、それを受けて児童文化研究者、児童文学者、口承文芸学者、教育評論家、教育研究者、保育研究者、声優などと質疑応答がかわされた（子どもの文化研究所，1984a, 1984b, 1984c）。さらに翌1985年4月、主催を同じくして「口演童話とストーリーテリングをきく会」とシンポジウムが開かれる（子どもの文化研究所，1985a, 1985b, 1985c, 1985d, 1985e）。その前後にも他団体主催による語りをめぐる座談会、連続講座などが開催され（上地，1985b）、金沢（1985a）が子どもの文化研究所長として「子どもたちに語りの世界を——語りの運動を展開しよう」と提唱する。さらに、同研究所編『子どもたちに語りの世界を やさしい語りの入門書』（1985）が出版される。

こうした一連の童話の語りをめぐる動きのなか、上地（1985a, 1985c, 1985d, 1985e, 1985f）は論考で戦時の口演童話の利用効果にふれ、年表には、国策協力の催しの項目を盛り込む。金沢（1985b）は教育と児童文化における戦時体制への同調と童話の活動、終戦直後の児童文化活動に取り組んだ動機、戦時協力に関する後悔と責任を明らかにした。金沢の後輩に当たる富田も「口演童話とストーリーテリングをきく会」とシンポジウムで戦中の口演童話活動をふりかえり、そこから離れようとした経緯を語る（子どもの文化研究所，1985a）。このように口演童話の実践者を中心に戦時の活動の一端が明らかにされた。

では、口演童話の戦時利用に向き合う上地や金沢の論述の背景にあつた社会の動向を、吉田（2005）はどう分析しているか。吉田は1980年代を、1982年の教科書検定の国際問題化を皮切りに「ダブル・スタンダードの動揺」（吉田，2005: 185）と位置づける。高校用教科書で十五年戦争を中心に侵略性、加害性を排除する検定がおこなわれてきたことに対し、中国や韓国で強硬な対日批判が起こり、結果、教科書検定基準が改定される。このほかに吉田は、ダブル・スタンダードがほころび始めた原因として、中曽根内閣が1986年に入ってから、アジア地域での政治的リーダーシップ発揮のため、侵略的事実を認める方向で対外的配慮を始めたこと、東南アジアを中心に直接投資が増大し、財界人が戦争責任問題を認識し出したことを挙げ、戦争観を概観する。昭和天皇の高齢化により天皇や側近が平和主義者であったとみなす宮中グループ史観と海軍エリート主義を肯定する海軍史観の台頭により大東亜戦争が正当化できないものとなったこと、日本軍の諸作戦失敗に組織経営を学ぶという戦争責任否定につながりかねない「経営書」的戦記ブーム、侵略性・加害性を含めた戦争体験を人生のなかに位置づけようとする元兵士らの投稿や手記などがあり、国民意識に「侵略戦争」、「やむをえない戦争」という認識が共存するという分析である。

先に挙げた上地、金沢、富田らによる口演童話の歴史把握は、子どもへの童話の語りの意義、必要性を



考えていく上で戦時の国策協力という点は無視できないという認識である。この認識にはアジアにおける日本軍の侵略性を認めていく社会動向の影響がうかがえる。また、金沢と富田の口演童話をめぐる回想には、口演童話という児童文化を通した国策協力の体験をみずからの人生に位置づける意識を読み取ることができる。以上から、研究や言説の対象としての口演童話に対し、1970年代までとは異なる姿勢が出てきたと言える。次節では、この姿勢が1990年代になってどのように展開していくのかを見ていくことにする。

## 7. 戦後50年を迎える1990年代の口演童話研究

前節に取り上げた、上地の口演童話とストーリーテリングの略年表は、口演童話を語りの文化史に位置づけた端緒である。この年表は1985年のうちに機関誌『子どもの文化』に連載され、2冊の書籍<sup>17</sup>にも加筆して所収された。年表を契機として、1990年代には口演童話の学術研究が次々と発表されていく。

金沢嘉市が1986年に没したのち、上地は金沢の戦前・戦中期の童話活動に注目し、金沢の児童文化関連資料をまとめた著作集『金沢嘉市の仕事1 児童文化とともに』（1989）の編集実務に当たる。また、上地は金沢嘉市研究会のメンバーとして、金沢の童話の語りの変容（1991）、金沢の口演童話観（1994）、金沢の口演童話の方法と思想（1995）に関する論考を発表したのち、口演童話の思想と技術の通史（1997）をまとめる。ほかの歴史的考察として、勢家（1993）による、口演童話を含む明治期から平成期にいたる語りの歴史の年表化、谷出（1993）や櫻井（1993, 1997）による、語りの形態、語り手と聞き手たる子どもにとっての語りの持つ意味の変遷に関する論考がある。磯部（1993, 1995）は名古屋を中心とした愛知県における口演童話活動の普及と展開を対象とする。これらの研究は、磯部の仏教日曜学校運動の論考（1995）を除き、どの論述にも口演童話の戦時協力に関する言及がある。

口演童話が戦前のナショナリズムに果たした役割を考察し、注目される実績を残したのは游（1999）である。そこでは、日本植民地時代（1895-1945年）の台湾をめぐって、口演童話をはじめとする児童文化の内地と外地との相互関係が検討される。口演童話家の台湾訪問、台湾における日本人の児童文化活動、台湾の児童文化の内地への影響の実証的な考察である。游の研究活動には1993年にお茶の水女子大学修士学位論文申請、1996年に同大学博士学位論文申請という経歴があり、1990年代初頭からの蓄積がある。

また、歴史的アプローチとは別に、有働（1992）の論考は国語科教育の観点によるもので、大正期に口演童話をおこなった教師の論述を検討し、口演童話の言語教育における可能性をさぐる。

1980年代なかばに戦前・戦中期を含めた口演童話の評価が始まり、1990年代には歴史的なアプローチを中心に、語りやストーリーテリングというマクロの流れのなかに口演童話をどう位置づけるかという研究が複数登場した。その切り口は一小学校教師の経歴・童話観を通した考察、通史における思想・技術に注目した考察、語られ方の形態に焦点を当てた考察、地域展開を対象とした考察、植民地と内地の相互関係を明らかにしようとした考察など、多様な展開を見せた。

吉田（2005）は論考の発表年1995年が戦後50年に当たるため、戦後50年をめぐる状況を以下のように把握する。一つには「大東亜戦争肯定論」が急速に後退し、細川内閣以後の歴代内閣が侵略を反省して植民地統治の責任を認めるようになり、国民レベルでも侵略性、加害性が認識されるようになった点である。だが、侵略性、加害性は認めたくないという意識のある限り、戦争の結果としてアジア諸国の独立が進んだという論が残りつづけるとも指摘する。いま一つは、政治主義的、現実主義的な戦争観が主流を占めるという点である。政府が「侵略的行為」の存在は肯定しても「侵略戦争」とは表現しない状況下で、国民の意識調査からは「侵略戦争」、「やむをえない戦争」という80年代からの認識の共存に変化が見られない。戦争責任をタブー視してきたために若い世代に戦時の事実が十分に伝えられず、戦争シミュレーションゲームのようなあやうい事例も見受けられると吉田は危惧する。

次世代に歴史をどう伝えていくかという課題については、口演童話研究も1990年代に新たな局面を迎えた。戦前・戦中期に口演童話を実践していた人びとが鬼籍に入り、口演童話を直接に体験したことのある

研究者もいるが、直接には体験していない年代の研究者も現れ、制約のなかで口演童話の歴史的、社会的評価がおこなわれていく状況も出てきた。事実を知る人びとの体験、記憶からデータを得る調査が難しくなったため、書き残された文献のほか、写真、歴史的音源などのデータを対象として分析に取り組む研究方法への移行が進んだのである。

## 8. おわりに

本研究では、明治期なかば過ぎから 1950 年代なかばまで盛んであった口演童話を対象とする研究の第二次世界大戦後の展開を追い、その内容の整理を試みた。戦後日本の戦争観の変容についての吉田論考の時代区分に沿い、口演童話研究で戦時下の国策協力がどう扱われているかに注目し、研究蓄積を検討した。口演童話研究の流れは、以下のように押さえられる。まず、占領期からサンフランシスコ講和条約にいたるまでに発表された童話論には「平和」、「民主主義」といった新たな価値観にもとづく童話のあり方を提言する記述があった。だが、前提として戦時協力の責任をどう引き受けるかという言及はなかった。その状況はダブル・スタンダード成立の 1950 年代に発表された童話論においても同様で、どの時代にも通じる技術論、理念が論じられているため、戦前・戦後という断絶がなかったかのようにも受け止められた。論述のなかには、アジアへの配慮を欠く内容も見受けられた。

吉田は 1960 年代を、高度成長期を迎え「戦争の『風化』」が進んだ時代とする。この時代には、各種メディア普及により口演童話の後退がいよいよ進み、幼児教育史のなかに口演童話を通しての教育を位置づけようとする論考、口演童話の盛衰を歴史的にとらえていこうとする萌芽を含む論考が登場した。1970 年代はオイル・ショックで高度成長が終焉を迎え、ダブル・スタンダードが再編されるまでの過渡期だと吉田はとらえる。口演童話の滅亡が危惧され、通史が編纂されたものの、口演童話研究は 1980 年代なかばまで事実上の空白期を迎える。1980 年代なかばになって、実践者の一次的な復活、戦時協力の告白により、語りや児童文化に関心とする人びとの間で口演童話に注目が集まる。それを契機として、国策協力を含む口演童話の研究が端緒についた。1990 年代になり、口演童話研究は歴史的アプローチを中心にいくつかの成果を見た。国策協力を含めた通史を独自の切り口で検討する試みが複数登場し、語りやストーリーテリングという文化の流れのなかに位置づけようとする研究が蓄積されるようになった。1990 年代以降の研究は主に学界で展開され、口演童話を直接には知らない層によっても担われるようになった。

上記のように流れを整理した結果、口演童話研究には戦争をどうとらえるか、戦時期の営みをどう歴史に位置づけるかという戦後史のなかでの日本人の戦争観の変遷と響き合う傾向があると分かった。口演童話という一文化が後退していく流れにおいて、文化の担い手である実践者や関係者が、自分の取り組んだ文化の歴史を後代に伝えていきたいという動機が発達史成立の条件になる。だが、研究蓄積の時代区分ごとの傾向に当たったところ、口演童話の発達史がどう書き残されるか、項目として何が盛り込まれるかという点は、研究が取り組まれる時代の背景、社会思潮に影響を受けていることが明らかになった。

口演童話には草創期からナショナリズムに沿う形で発達し、第二次世界大戦前・戦中期には戦意昂揚に貢献する手段と化す歴史があったため、そのような思想面を含めての評価は、戦争責任をどう評価するかという観点と通じ合うものがある。口演童話の後退理由として上地（1997）が挙げた通り、関係者たちが「戦前・戦中期の責任は不問のまま」（上地，1997: 192）とした姿勢が戦争責任をめぐる日本人の戦争観と並行してある。吉田（2005）の言う、対外用と国内向けの戦争責任の使い分けとしてのダブル・スタンダードの存在が、口演童話の戦争責任の認識の遅れ、研究の遅れにもつながったと理解される。

本研究においては、吉田（2005）の論の枠組みを用いた分析をおこなったため、戦争責任の課題がほとんど伝えられない若い世代によって担われる 2000 年以降の口演童話研究の評価をおこなっていない。口演童話を直接に経験していない研究者による研究蓄積の評価と課題については、稿を改めて検討したい。

- <sup>1</sup> 大正期の実演として、「マイクのなかった時代で、聴衆の数は次第に増え、二百名三百名から五百名八百名千名にも及ぶこととなり、中には町の二校の小学上級生を大講堂に収容し、千数百名を対象としてお伽話を聞かせるということも稀ではなかった」（内山, 1972c: 164）。『日本口演童話史』（1972）から各地の実演に関する記録を拾うと、その会場は学校の講堂や幼稚園、寺社、教会、野天、公会堂などである。
- <sup>2</sup> 「作家である巖谷小波と、教育者としての岸边福雄の試み」（富田, 1985: 46-47）によるお伽噺の実演とされる。
- <sup>3</sup> たとえば、東京高等師範学校の在學生と卒業生が1915年に結成した大塚講話会では、夏期休暇に日本国内ばかりではなく台湾、樺太、満州にも長期にわたる講演旅行を実施した（樫葉, 1972）。
- <sup>4</sup> 1925年に松美佐雄が使い始めた呼称。松美は教育者が大規模会場でおこなわれる口演童話をそのまま教室に持ち込むことに批判的であった（松美, 1941）。1938年には青山師範学校の卒業生により「教室童話研究会」が結成される。
- <sup>5</sup> 上地（1997）によれば、1953年に朝日新聞社が組織した「朝日児童文化の会」の主な活動は話方文化で、全国の口演童話家、児童文化関係者の協力を仰いだ。同機関紙の発行を確認できるのは1956年3月号までであるため、そのあたりまでを口演童話の活動期だと判断できる。
- <sup>6</sup> オング（1982=1991）が文字の文化〔リテラシー〕に対し、提示した概念。
- <sup>7</sup> 宮澤（2002a）により「ある集団によって歴史的に形成され共有された、次世代育成に関わる生活の仕方」と定義される。
- <sup>8</sup> 1938年に青山師範学校童話部出身者らが小学校での童話教育の研究と実践のために結成（宮川, 1993）。機関誌『教室童話』によれば、大衆化した口演童話に批判的立場で、教育としての童話の確立を目指した。
- <sup>9</sup> 設立メンバーは後藤樽根、倉沢栄吉、原まさる（金沢, 1985b）。
- <sup>10</sup> 国立国会図書館サーチによれば、[1巻1号（1946年5月）—4巻5号通巻22号（1949年7月）]の刊行。
- <sup>11</sup> 1908-1986。戦前に教室童話研究会の理論派として活躍した小学校教師。戦時中は日本少国民文化協会童話部の幹事を務めたが戦後は戦時協力の反省をし、歴史教育、平和教育に尽力（金沢嘉市著作編集委員会編, 1989）。
- <sup>12</sup> 東京都港区桜川小学校。
- <sup>13</sup> 児童文化にも多くの足跡を残した児童文学者。創作お伽噺を少年少女雑誌、幼年雑誌に数多く発表（藤本, 2001）。
- <sup>14</sup> 巖谷小波『桃太郎主義の教育』（1915）に表現された「勇敢で進取の気象に富んだ桃太郎主義教育の樂觀的児童観」（唐澤, 1968: 508-509）の理念。上・山崎（1965）は、桃太郎の持つ資質が、欧米列強に追いつくためのアジア諸国の侵略主義に貢献するものになったと指摘する。
- <sup>15</sup> 1952年2月から七次にわたる日韓会談が開催、65年6月に日韓基本条約調印、同年12月に批准。1971年10月、国連総会で中国の国連加盟決定、1972年2月、ニクソン大統領の訪中、米中共同声明を受け、1972年9月に田中角栄内閣が日中共同声明調印（吉田, 2005）。
- <sup>16</sup> 「雨つぶさん」「三匹のヤギさん」の二つを語った（子どもの文化研究所, 1984a, 1984b）。
- <sup>17</sup> 『子どもたちに語りの世界を やさしい語りの入門書』（1985）、『ストーリーテリング』（1985）

#### <引用文献>

- 安倍季雄, 1954, 『話のコツ』恒星社厚生閣。
- 安部悟堂, 1956, 『父母と教師のための童話の正しい話し方』春秋社。
- 堀田穰, 2008, 「口演童話研究ノート 第12回」『語りの世界』46, 語り手たちの会: 68-73。
- 藤本芳則, 2001, 「『こがね丸』巖谷小波」鳥越信編著『はじめて学ぶ日本児童文学史』ミネルヴァ書房: 79-82。
- 原まさる, 1953, 『お話台本と話方の研究』刀江書院。
- 磯部孝子, 1993, 『名古屋と周辺地域の口演童話活動——明治末から昭和前期まで』『文化科学研究』4(2): 17-29。
- , 1995, 「仏教日曜学校の成立と口演童話活動」『文化科学研究』6(3): 79-93。
- 影山昇, 1988, 『日本の教育の歩み』有斐閣。

- 上笙一郎・山崎朋子, 1965, 「児童文学と幼な子たち」『日本の幼稚園』理論社: 84-102.
- 上地ちづ子, 1985a, 「新しい語りを——語りの流れと広がり」金沢嘉市・上地ちづ子・子どもの文化研究所編『子どもたちに語りの世界を』童心社: 48-71.
- , 1985b, 「ブームの『語り』でなく 現況および『口演童話とストーリーテリングをきく会』報告」『子どもの文化』17(6)179, 子どもの文化研究所: 36-37.
- , 1985c, 「語りの系譜をたどる (1) 大正期に花ひらいた口演童話」『子どもの文化』17(5)178, 子どもの文化研究所: 40-43.
- , 1985d, 「語りの系譜をたどる (2) 図書館活動によるストーリーテリングの普及」『子どもの文化』17(6)179, 子どもの文化研究所: 38-41.
- , 1985e, 「口演童話とストーリーテリング略年表」野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂: 267-278.
- , 1985f, 「(資料) 口演童話とストーリーテリング&子どもの文化略年表」金沢嘉市・上地ちづ子・子どもの文化研究所編『子どもたちに語りの世界を』童心社: 72-85.
- , 1991a, 「金沢嘉市と桜川小学校——戦後教育の旅立ち(1)『これから正しいことを教えます』40年後の教え子たちによる金沢像」教育科学研究会編『教育』41(4): 70-79.
- , 1991b, 「教師時代の金沢嘉市の語りの変容」『語りの世界』13, 語り手たちの会: 16-21.
- , 1997, 「口演童話の方法と思想」日本児童文学学会編『研究＝日本の児童文学2 児童文学の思想史・社会史』東京書籍: 169-196.
- 金沢嘉市, 1951, 「おはなし教育の根本問題」菅忠道・関英雄・早川元二編『現代児童文化講座 上巻』双龍社: 180-197.
- , 1985a, 「子どもたちに語りの世界を——語りの運動を展開しよう」『子どもの文化』17(5)178, 子どもの文化研究所: 38-39.
- , 1985b, 「私と口演童話」野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂: 64-84.
- 金沢嘉市著作集編集委員会編, 1989, 『金沢嘉市の仕事1 児童文化とともに——子どもたちの心をより豊かに』あゆみ出版.
- 唐澤富太郎, 1968, 『図説 明治100年の児童史 上』講談社.
- 檜葉勇, 1956, 『童話研究手帖——話方を中心として』日本童話教育会.
- , 1972, 「大塚講話会」内山憲尚編著『日本口演童話史』文化書房博文社: 64-65.
- 河合徳司, 1983, 「教室の歩み」教室童話研究会編『すぐ話せる幼児童話台本集』教室童話研究会: 389-449.
- 川勝泰介, 2008, 「児童文化とは何か」原昌・片岡輝編著『児童文化〔第2版〕』建帛社: 1-11. [初版: 2004.]
- 金成妍(キムソンヨン), 2010, 『越境する文化——朝鮮児童文学の生成と日本児童文学者による口演童話活動』花書院.
- 倉沢栄吉, 1971, 「口演童話の創造と変革」日本児童文芸家協会編『児童文学 第6集』日本児童文芸家協会: 5-20.
- 黒田てるゆき, 1958, 「口演童話の教育的意義——文学教育の一つの方法として」『実践国語』19(210), 穂波出版社: 111-114.
- 子どもの文化研究所, 1984a, 「<金沢嘉市先生の口演童話をきく会>記録 (1) 口演童話『雨つぶさん』」『子どもの文化』16(9)170, 子どもの文化研究所: 54-59.
- , 1984, 「<金沢嘉市先生の口演童話をきく会>記録 (2) 子どもの心をひらく語り」『子どもの文化』16(10)171, 子どもの文化研究所: 46-51.
- , 1984c, 「<金沢嘉市先生の口演童話をきく会>記録 (3) 新しい語りの展開を」『子どもの文化』16(11)172, 子どもの文化研究所: 42-47.

- , 1985a, 「く口演童話とストーリーテリングをきく会」シンポジウム記録 (1) 口演童話の再検討を 富田博之氏問題提起 『子どもの文化』17(7)180, 子どもの文化研究所: 42-47.
- , 1985b, 「く口演童話とストーリーテリングをきく会」シンポジウム記録 (2) 基本的には同じ口演童話とストーリーテリング 富田博之氏と上笙一郎氏の問題提起 『子どもの文化』17(9)182, 子どもの文化研究所: 40-46.
- , 1985c, 「く口演童話とストーリーテリングをきく会」シンポジウム記録 (3) 口演童話の欠陥ストーリーテリングへの疑問 上笙一郎氏の問題提起と松岡享子氏の意見 『子どもの文化』17(10)183, 子どもの文化研究所: 46-51.
- , 1985d, 「く口演童話とストーリーテリングをきく会」シンポジウム記録 (4) 子どもたちの未来のためにもストーリーテリングを 松岡享子氏の意見と野村純一氏の分析 『子どもの文化』17(11)184, 子どもの文化研究所: 32-37.
- , 1985e, 「く口演童話とストーリーテリングをきく会」シンポジウム記録 (5) 語りの世界の独自性 母親の語りを原点に 野村純一氏の分析と金沢嘉市氏の提言 『子どもの文化』17(12)185, 子どもの文化研究所: 46-49.
- 正月定夫, 1974, 『幼児童話——その語り方と教育的効果』春陽社出版.
- 松美佐雄, 1941, 『教室童話学』日本童話連盟本部.
- 松山鮎子, 2010, 「口演童話の学校教育への普及過程——社会活動における教師の学びに着目して」『早稲田大学大学院教育学研究科紀要』別冊(18-1), 早稲田大学大学院教育学研究科: 79-88.
- 宮川健郎, 1993, 「教室童話研究会」大阪国際児童文学館『日本児童文学大事典 2』大日本図書: 348.
- 宮澤康人, 2002a, 「教育文化をどのように見るか(序論)」宮澤康人編著『教育文化論——発達の環境と教育関係』財団法人放送大学教育振興会: 13-24.
- , 2002b, 「識字化(リテラシー)と声の文化」宮澤康人編著『教育文化論——発達の環境と教育関係』財団法人放送大学教育振興会: 95-107.
- 三輪和敏, 1947, 『童話教育論』教育文庫6, 河出書房.
- Ong, Walter, J., 1982, *Orality and Literacy——The Technologizing of the Word*, London: Methuen&Co.Ltd.  
(=1991, 桜井直文ほか訳『声の文化と文字の文化』藤原書店.)
- 櫻井美紀, 1993, 「近代から現代への語りの歴史」勢家肇編『童話の語り発達史』海鳥社: 189-204.
- , 1997, 「口演童話から語り手運動まで」久保田淳他編集委員『岩波講座 日本文学史 第17巻 口承文学2・アイヌ文学』岩波講座日本文学史(17), 岩波書店: 95-114.
- 勢家肇, 1993, 「『語り』の歴史」勢家肇編『童話の語り発達史』海鳥社: 7-46.
- 瀬田貞二, 1982, 『落穂ひろい——日本の子どもの文化をめぐる人びと<下巻>』福音館書店.
- 谷出千代子, 1993, 「童話の語りに関する史的考察」勢家肇編『童話の語り発達史』海鳥社: 129-187.
- 富田博之, 1985, 「日本のストーリーテリングとしての『口演童話』」野村純一・佐藤涼子・江森隆子編『ストーリーテリング』弘文堂: 43-63.
- 内山憲尚, 1957, 『童話学入門』東京文化研究所出版部.
- , 1963, 「第八章 口演童話」福田清人・滑川道夫・鳥越信編『児童文学概論』牧書店: 296-302.
- , 1972a, 「はじめに」内山憲尚編著『日本口演童話史』文化書房博文社: 前付(ページ記載なし).
- , 1972b, 「岸辺福雄」内山憲尚編著『日本口演童話史』文化書房博文社: 28-34.
- , 1972c, 「口演童話」滑川道夫・菅忠道編『近代日本の児童文化』新評論: 156-172.
- 有働玲子, 1992, 「大正期の口演童話——下位春吉・水田光を中心にして」『聖徳大学研究紀要 第二分冊、短期大学部(Ⅰ)』(25), 聖徳大学: 195-206.
- 吉田裕, 2005, 『日本人の戦争観——戦後史のなかの変容』岩波現代文庫. [初版: 1995]

游珮芸（ユウペイユン），1999,『植民地台湾の児童文化』明石書店.

<Web.>

国立国会図書館，サーチにて，項目「童話. 児童文化総合雑誌」，<http://iss.ndl.go.jp/books/R100000039-I002524337-00>（2016年6月8日閲覧）.